

KDDI 総研 R&A 誌は定期購読（年間 29,988 円）がおすすめです。お申し込みは、KDDI 総研ブックオンデマンドサービスまで。既刊の PDF 無料ダウンロードの特典もあります。

(<http://www.bookpark.ne.jp/kddi/>)

中国携帯電話市場の最近の動向



KDDI総研R&A

2004年9月

## 中国携帯電話市場の最近の動向

🕒 記事のポイント

**サマリー** 中国の3G免許発給計画は依然不透明な状態が続いているが、2005年中には発給されるのではないかと期待が高まっている。一方、免許の数が当初の予想よりも絞られるかもしれず、それに伴い事業者間の統合の動きが出てくるとい憶測も流れる。既存の携帯電話事業者の中国聯通と中国移動の新サービス、また携帯電話のライバルである「小靈通」サービスの動向等についても触れる。

**主な登場者** 情報産業部 中国移動 中国聯通 中国電信 中国網通

**キーワード** 携帯電話 小靈通

**地域** アジア 中華人民共和国

**執筆者** KDDI総研 調査2部 近藤 麻美 (as-kondou@kddi.com)

### 1 3G免許

中国の携帯電話加入者数が2004年5月に3億人を突破し、6月末現在、3億528万人に達している。携帯加入者は今後もスピードはやや鈍るものの順調に増え続け、2007～08年までには5億人を超えると予想されている。

中国の通信コンサルティング会社CCIDの予測では、その頃には携帯加入者の約3割が3G携帯を使用しているだろうという。

しかし中国政府は未だに3G免許の発給スケジュールに関して何ら具体的なことは示していない。

3G免許の計画には中国の独自技術であるTD-SCDMAの開発状況が大きく影響していると見られているが、これについて6月下旬、情報産業部（情報産業省）電子情報製品管理局の張琪（Zhang Qi）局長がTD-SCDMA方式による製品が来年6月までに出揃う見通しであると明らかにした。

それによると、端末はいずれもTD-SCDMAとWCDMAまたはCDMA 2000とのデュアルモードになる予定で、2005年5～6月頃には国産チップを使ったTD-SCDMA端末

が少なくとも5、6種類登場するだろうという<sup>㉞</sup>(出典)。

免許の発給時期や数等の具体的な計画については信息产业部は依然沈黙しているが、この発言を受けて、業界内では2005年中頃に3G免許が出るのではないかとという観測がなされている。

現在は6つの主要な基礎電信事業者<sup>㉞</sup>(用語解説)とメーカー各社が参加して主要都市で3G技術の屋外実験が行なわれている。実験は9月末に終了予定で、その頃には3Gに関する政府の計画がもう少し明らかになるのではないかと期待される。

3G免許の数についてもやはり未定ではあるが、以前、呉基伝・前信息产业部長が将来的に中国電信と中国网通にも移動体免許を与えて固定/携帯の総合通信事業者を4社とするという構想を述べたことがあり、既存の携帯電話事業者である中国移动と中国聯通を合わせ、全部で4件の3G免許が出る可能性が高いとこれまで考えられてきた。

しかしこのところ中国移动と中国聯通の2社だけでも料金値下げ競争の過熱が問題になっており、また建設コストのかかる3Gネットワーク市場に必要以上に多くの事業者が参入すればインフラの「重複建設」につながり、投資が無駄になるという慎重論が浮上し、免許の数はもっと絞られる可能性も出てきた。極端な場合には既存携帯事業者の中国移动と中国聯通にしか免許は付与されないという予想もあり、予断できない状況が続いている。またそれに伴って政府が基礎電信事業者同士の合併を検討し始めているという噂も流れている(コラム参照)。



<sup>㉞</sup>(出典)

『信産部官員称TD-SCDMA標準明年年中投入商用』(2004年6月22日 新浪科技)

<sup>㉞</sup>(用語解説) 基礎電信事業者

中国の「電信条例」による通信業務分類で、公衆網設備、公衆データ伝送、基本音声サービスを提供する業務を指す。主要基礎電信事業者6社とは、中国電信(固定)、中国移动(携帯)、中国聯通(固定および携帯)、中国网通(固定)、中国鉄通(固定)、中国衛星通信(衛星通信業務)を指し、いずれも国有企業である。6社の売上ベース市場シェアは中国移动が最大で約40%、次いで中国電信(約30%)、中国聯通、中国网通(各10数%)の順となっており、鉄通と衛星通信のシェアは2社合わせても2~3%に満たない。

## 【コラム】中国通信事業者再編の予兆？

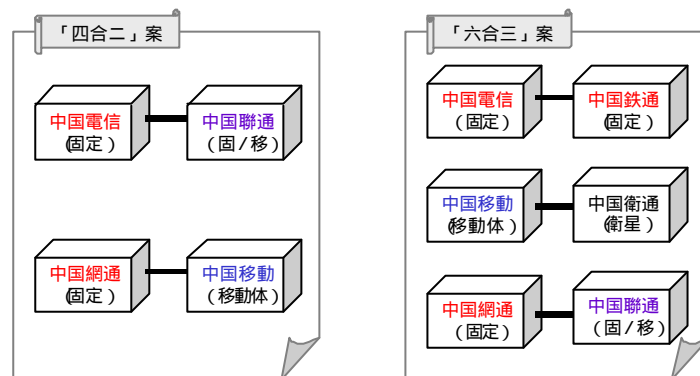
発端は5月下旬に香港で、中国の4大基礎電信事業者を統合する計画がひそかに進められているとの報道が出たことだった。

それによると、中国電信（China Telecom）、中国移動（China Mobile）、中国網通（China Netcom）、中国聯通（China Unicom）の4つの事業者のうち、中国電信と中国聯通、中国移動と中国網通を合併させ、デュオポリー体制をつくるという「四合二」案が検討されており、既に建議書が国務院に提出されているという。

信息产业部はただちにこの報道を否定したが、その後も「四合二」案に関する報道はやまず、「四合二」案に加えて、4大事業者の他に中国鉄通（China Railcom）、中国衛星通信（China Satcom）の2つの国有事業者も巻き込んで再編する「六合三」案というのも出てきた。

しかしいまのところ業界内でも合併案に懐疑的な意見が主流であり、またその後新たな情報が出てこないこともあり、7月中旬以降報道は下火になっている。

ただし過去、旧・中国電信が南北分割された際も分割の噂が出た当初は信息产业部は否定したが、そのわずか半年余り後に分割案が国務院を通過して公に発表されており、今回の再編の噂についても今後の動きが注目される。



## 2 聯通のGSM 1Xがスタート

GSMとCDMAの両サービスを営業している中国聯通がかねてから開発を進めてきたGSM 1XによるGSMとCDMA 1Xのデュアルモード端末「世界風」(World Wind)の販売が一部主要都市で8月5日から始まった。

GSM 1Xは1台の端末にGSMのSIMとCDMA 1XのUIMの両方が同時に装填でき、2種類の網の間を自由に切り替えられる。

1台の端末でGSMとCDMAの二つのサービスが利用可能で、これで“真のグローバル・ローミングが実現する”と聯通は売り込んでいる。

またGSMユーザも動画ダウンロードやBREWアプリによるゲーム等、CDMA 1Xの高付加価値サービスを利用できるようになる。

「世界風」端末は聯通のGSMだけでなく、中国移动のGSM SIMカードも使える(ただし機種によってはGPRSには対応していない)。聯通は「世界風」で中国移动のハイエンドユーザをCDMA 1Xサービスに誘導したいと考えている。

「世界風」ブランドの端末はMotorola、SamsungおよびLG電子製の3機種が発売される。価格はやや高めで4,000～5,000元(約52,000～65,000円)<sup>④</sup>(換算率)ほど。中国の携帯電話事業者が自社ブランドの端末を発売するのは異例なことで、その点でも注目されている<sup>⑤</sup>(脚注)。

しかし当初は発売台数が限られるため、品不足がサービス普及の足を引っ張る可能性が懸念されている。

中国聯通の約1億人の加入者の中でCDMA加入者はまだ2,300万人程度であり、そのうち1Xユーザは更に少ない400万人ほどに過ぎないが、聯通は2004年末までに1Xユーザ1,000万人達成を目指している。

【表】GSM 1X端末

	Motorola A860 	Samsung SCH-W109 	LG W800 
サイズ	94 x 49 x 23mm	87 x 52 x 24.5mm	93 x 48 x 24.6mm
重量	115g	130g	113g
連続通話時間	100～300分	150～300分	220分
連続待受時間	50～150時間	100～200時間	220時間
カメラ	○(120万画素)	○(30万画素)	○(30万画素)
その他	・MP3    ・BREW ・GPRSにも対応	・BREW ・GPSOne	・Java

(各種資料に基づきKDDI総研作成)



<sup>④</sup>(換算率)

1元 = 13円(2004年7月1日中国国家外貨管理局)

<sup>⑤</sup>(脚注)

一方、ライバルの中国移动は8月中に中国の大手携帯端末メーカーの東信、波導、華為、中興等との共同出資による携帯電話の販売・アフターサービスのための新会社を設立する計画である。中国の携帯電話事業者とメーカーとの連携は一層深まりつつある。

一方、中国移动は聯通の「世界風」に対抗して、1枚のSIMカードに複数の番号情報を書き込める「一.双号」(“1枚のカードで二つの番号”の意)サービスを開発中だと発表した。「一.双号」があればいちいちSIMを差替えなくても私用と仕事用の番号を使い分けたり、出張の際などにローミング料金が節約できる等のメリットがあり、中国移动はこれにより主にハイエンドのビジネスユーザのつなぎ止めを図ろうと狙っているようだ。

### 3 小靈通ユーザ6千万人

中国電信と網通が各地で展開しているPHSサービス「小靈通」の加入者は6月末現在、全国で5,000万人を超え6,000万人近くに達していると推定される。うち中国電信が約3,300万人、網通が約2,700万人の加入者を擁する。2003年末の時点から半年間で2,500万人近く増えており、近い将来1億人に達するだろうとの予測もある。

「小靈通」の主要ベンダーであるUT Starcomは、次にPHSとGSMのデュアルモード機の発売を計画し、中国電信等に働きかけているもようである。

デュアルモード端末は台湾やベトナムで既に販売されている。GSMのSIMカードが装填できるようになっており、「小靈通」の電波の圏外やサービスエリア外ではGSM携帯電話機として使用できる。携帯より通話料が安い「小靈通」と、カバレッジが広く海外ローミングも利用できる携帯電話の両方のメリットを享受できるので、ハイエンドの携帯電話ユーザにとっても魅力的な商品となる可能性がある。

しかし中国では「小靈通」は固定電話の補完的サービスという位置付けで移動体通信技術として認められていないため、信息产业部の認可は容易に下りそうにない状況である<sup>(脚注)</sup>。

UT Starcom の小靈通 / GSM  
デュアルモード端末 (UT818)



- ・サイズ：88×45×21mm
- ・65535色 TFT 液晶
- ・GSM900 / PAS デュアル



<sup>(脚注)</sup>

広州市内では既にUTスターコム製のデュアルモード端末が密かに流通しているとの情報がある(『双模小靈通偷偷上市』、7月21日 中国経済時報)

## 📖 執筆者コメント

情報産業部は表向きには技術的に中立の立場をとっており、どの3G技術を採用するかは事業者の自由であると強調しているが、既に3G周波数計画においてTD-SCDMAにはWCDMAやCDMA 2000よりも広い帯域幅が割り当てられることが決まっており、同部がTD-SCDMAに肩入れする姿勢は明白である。

日本のDVD規格に対抗するEVD、IntelのCentrinoに対抗するWAPI等、このところ中国政府による“テクノ・ナショナリズム”的な動きが目立ってきているが、TD-SCDMAもその一つで、第2世代携帯電話では欧米メーカーに市場を席卷された苦い経験から、次世代では是非国産技術による国産メーカーの製品を市場の主流にしたいという強い意欲がある。またTD-SCDMAをちらつかせることで外国メーカーをけん制し、WCDMAやCDMA 2000技術の導入に当たり価格交渉等を有利に進めたいという思惑もあるようだ。

しかし携帯電話事業者側は中国移動も中国聯通も、いつ商用化が実現するか見通しがきかない国産技術に対しては冷めた見方をしているようだ。従って3G市場の主流はやはりWCDMAまたはCDMA 2000となるだろうが、TD-SCDMAも一部の地域で補完的に導入される可能性はある。ただし、それが商業的にどこまで成功するかは未知数だ。いくら政策的なバックアップがあっても、WAPIもEVDも今のところ市場で支持されているとは言い難い。

中国としては2008年に北京五輪が開催される頃までに固定も移動体も本格的なブロードバンド時代を実現し、“デジタル・チャイナ”のイメージを世界にアピールしたいという希望もある。そのためにはそろそろ3Gの計画も明確化すべきタイムリミットは迫ってきているといえるだろう。

## 📖 出典・参考文献

新浪網ニュースサイト (<http://tech.sina.com.cn/>)

情報産業部 (<http://www.mii.gov.cn/>)

TD-SCDMA Forumホームページ (<http://www.tdscdma-forum.org>)